午後の楽隊
眉村　卓
講談社
(4/13刊・¥890)

大河小説『消滅の光輪』の著者の、いま一つの顔である。

ある休日の土曜日、古い自転車を持ち出した主人公は、別世界の町に抜け出してしまう。そこは、彼の住んでいた町と、微妙に食い違っているのだ――「知りつくした街」。目には何の異常もないのに、口煩い妻だけが見えなくなってしまった男――「透明妻」。どんな鍵穴にも合う、不思議な鍵を手に入れた主人公――「鍵束の中に……」。ようやく大企業に入社した新入社員は、わずか三十分、時間を間違えただけで、コンピューターに締め出される――「社員証」。

本書には、経済紙や、一般雑誌などに掲載されたショート・ショート、計三十八編が収められている。

この中で、登場人物たちは、懸命に現実を生きようとする――けれども、生きていく現実は、あまりにも味気ない。日常を逸脱したくはない、しかし、日常から解き放たれたい。『午後の楽隊』に描かれるのは、そういった、相矛盾する思いを秘めた（しかも、ごく平凡な）人々が、一瞬夢見るあやかしの世界である。（俊）